

彙報

第五二回野尻湖クリルタイ

岩田 啓介

第五二回野尻湖クリルタイ（日本アルタイ学会）は、二〇一五年七月一七日（金）～二〇日（月）の三泊四日の日程で、例年通り長野県野尻湖畔の藤屋旅館で開催された。参加者は、一部の日程のみの参加を含めて、合計三一名であった。以下ではまず、コンフェッションの概略を紹介する。論考等の副題は原則として省略し、「昨年」は二〇一四年を、「今年」は二〇一五年を指す。

阿部由美子（東洋文庫・学振PD）は、昨年七月に晩清史研究国際学術討論会で「晚清北京的学堂創辦和口話報」と題して口頭報告した。池田修太郎（立命館大D）は、清朝康熙年間の対モンゴル・チベット関係について研究を進める。磯部淳史（立命館大非常勤講師）は、「清朝皇帝と三藩」（『立命館東洋史学』三七）、河内良弘編著・本田道夫技術協力『満洲語辞典』の新刊紹介（『東洋史研究』七四―一）を執筆。また、昨年八月に立命館東洋史学会大会

彙報 岩田

にて口頭報告を行った。伊藤一馬（大阪市大・学振PD）は、昨年八月にロシア科学アカデミー東洋文献研究所にて宋代カラホト文書を調査した。また、今年五月にシンガポールで開催された AAWH（アジア世界史学会）にて北宋期の陝西に関して口頭報告を実施。林慶俊（イムルギョングン・東京大M）は、修士論文の準備中で、今年五月に満族史研究会大会にて「朝鮮旗人考」と題して報告した。岩田啓介（筑波大非常勤講師）は、昨年一二月に博士論文を提出。また、「チベット語に訳された詔の頒布からみる一八世紀前半の清朝―チベット関係の側面」（『日本西蔵学会々報』六〇）を執筆。牛根靖裕（立命館大非常勤講師）は、昨年一二月に九州史学会大会にて「達魯花赤の遷転・補任規定からみたモンゴル王公の人員任用」と題して口頭報告を実施。また、毎日文化センターに継続的に出講中。小倉智史（京都大・学振PD）は、今年三月に博士論文を提出し、「中世後期・近世カシミールにおける支配の正当性と宗教アイデンティティ」（今松泰・澤井一彰（編）『前近代南アジアにおけるイスラームの諸相』、「一五―一六世紀スリナガルのハーンカーヒ・ムアッラー」（『駿台史学』一五四）を執筆。さらに、国内外で五本の口頭報告を実施。小沼孝博（東北学院大）は、The Qing Dynasty and Its Central Asian Neighbors (Sakshar: A Journal of Manchu Studies, 12)

第九十七卷 三二七

「異人」イメージの政治性」(『東洋文化研究』一七)を執筆し、河原弥生・塩谷哲史とともに『An Encounter between the Qing Dynasty and Khogand in 1750-1760 (Frontiers of History in China, 9)』を発表。また、国内外で九本の口頭報告や講演を実施した。杉山清彦(東京大)は、『大清帝国の形成と八旗制』(名古屋大学出版会)を上梓。また、「二つの新興軍事政権」(清水光明(編)『近世化』論と日本) 勉誠出版)と、書評二本を執筆。関根知良(筑波大D)は、昨年九月に社会文化史学会大会にて「清朝の対ガルドン戦争におけるチャハル兵の軍事動員」と題して口頭報告した。田畑成基(明治大学部生)は初参加。乾隆初期の清朝と西北との関係について卒論を準備中。田広林(遼寧師範大)は夫人(張惠蘭・遼寧師範大)とともに初参加。遼西地方の考古と歴史文化に関して研究を進めている。中井勇人(大阪大M)は、海域アジア史研究会と近世史フォーラムにて、一五世紀の女真人と朝鮮との関係についてそれぞれ口頭報告した。中村和之(函館工業高専)は、「北からの蒙古襲来」について(『歴史と地理』六七七)、「中世・近世アイヌ論」(『岩波講座 日本歴史』二〇)等、五本の論考を執筆。今年五月に開催された前掲AWHにて口頭報告を実施。萩原守(神戸大)は、昨年九月に神戸大代表团とともにモンゴル国立大を公式訪問し、同大と学術交流協定を締結。そこで開催された記念シンポジウムにて基調講演するとともに、シンポジウムの報告書を編集・執筆。また、額定其勞と共著で「モンゴル法制史研究動向」(『法制史研究』六四)を発表。白玉冬(大阪大・学振外国人研究員)は、昨年の野尻湖クリルタイでの九姓タタルに関する報告について論考を準備中。ハスゴワ(神戸大M)は初参加。広くモンゴル社会に関心を持つ。船田善之(九州大)は、昨年十月に井黒忍とともに陝西省にてフィールド調査し、今年六月に鷹島海底遺跡の調査に参加した。また、「モンゴル (Mongol) 帝国 (大元) の華北投下領研究」(『中国史学』二四)を執筆し、今年五月に四川省で開催された宋元四川戦争中的神臂城高峰学術交流会等、国内外で六本の口頭報告・講演を実施。堀川徹(京都在大)は、宇山智彦・藤本透子(編)『カザフスタンを知るための六〇章』(明石書店)を分担執筆。朝日カルチャーセンター大阪教室とKEBUN文化センター草津教室にて連続講座を担当した。また、今年十月の内陸アジア史学会大会の会場を担当。前野(木戸)利衣(東京大・学振DC)は、昨年十月に内陸アジア史学会大会にて「一七世紀後半ハルハ」(『ザクトゥーン部』の権力構造)と題して口頭報告。また、チベット文献講読会『ダライラマ一四世の探索、認定、即位に関する報告書』訳注(上)(『史滴』三六)

を分担執筆。松田孝一（大阪国際大名誉教授）は、モンゴルでの碑文・遺蹟の調査等に関して、国内外で合計六本の講演・口頭報告を実施。また、昨年の発掘調査について今年二月に両国で記者発表。さらに、タイハル大岩の史格の墨書に関する論考のモンゴル語訳が *Historia Mongolarum* に掲載された。村上智見（帝塚山大・学振PD）は初参加。シルクロードの織物に関して研究を進める。今年度、日本モンゴル学会や西アジア考古学会等にて、オラーン・ヘルム壁画墓の出土品等に関して七本の研究報告や講演を実施。森川哲雄（九州大名誉教授）は六年ぶりの参加。この間、国内外で五本の口頭報告を実施。また、梅村坦・江上綏（編）『図録 文字から見る歴史と文化』（山川出版社）を分担執筆。さらに、これまでに発表した諸論考に加筆・修正し、中国語訳した『蒙古諸部族与蒙古文献研究』（白玉双訳・内蒙古人民出版社）が出版された。森部豊（関西大）は、『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉』（勉誠出版）を出版。また、「イランにおけるフレグ・ウルス遺跡調査報告」（『関西大学東西学術研究所紀要』四八）、「A Role of Sogds in the Political History of Northern China during the Tang and Five Dynasties Periods (MEMOIRS OF THE RESEARCH DEPARTMENT OF THE TOYO BUNKO, 72)」を発表。八木啓俊（大阪大学部生）は、「ティムール朝政治史に関して卒

論を準備中。山本明志（大阪国際大）は、敦煌や河南省での現地調査に参加。さらに、「河南省滎陽の金元時代の石刻史料」（『歴史評論』七八三）、昨年の野尻湖クリタイの彙報（『東洋学報』九六一三）を執筆し、九州史学会大会等で四本の口頭報告を実施。李雲（神戸大M）は、出身地のホルチン左翼中旗における一九二〇～三〇年代の土地開墾に関心を持つ。李玉君（遼寧師範大）は初参加。遼金法制史を研究しており、これまで『史学理論研究』『史学月刊』等に論考を発表している。劉貴福（遼寧師範大）は初参加。清末民初の思想文化を研究しており、昨年は、楊天石（主編）『錢玄同日記』（北京大学出版社）の出版に協力した。

続いて、報告の概要を記す。初日（一七日）は、口頭報告等のプログラムは組まれておらず、夕食後に野尻湖クリタイの歴史や最新の研究動向を語る懇親会の場が設けられた。

二日目（一八日）は、計五本の報告。午前最初の小沼孝博「一八世紀前半におけるトルファン社会の分断—エミン・ホージャ台頭の背景」は、トルファン郡王家の祖エミン・ホージャに着目し、トルファンの政治的社会的変動を考察。まず、エミン・ホージャが一七三三年の瓜州への移住後にジャサクとされ、一七五六年に清の規範を理解した者とし

てトルファン盆地東部のルクチュン城の管轄を委ねられたと指摘。他方、西部のトルファン城を管轄した土着の有力者マンリクが、オイラトとの間の旧来の統属関係を無視できず、一七五六年にオイラトに同調してエミン・ホー ज्याを襲撃したと分析。そして、エミン・ホー ज्याの台頭を、遊牧民との関係により存立をはかってきたトルファンにおける、遊牧民と定住民の政治的な相互依存の紐帯の後退としてまとめた。

続いて、関根知良「アオハンⅡモンゴルよりみるホンタイジ期のモンゴル統治」は、アオハンⅡモンゴルの動向に着目し、ホンタイジ期のモンゴル統治を分析した。ホンタイジの兄マングルタイ家がアオハンの当主ソノムドゥレと婚姻を結ぶ一方で、ホンタイジがアオハンのセチェンⅡジョリクトの家系と婚姻を結んだことを指摘。また、軍事動員や儀礼の実態を分析し、ホンタイジが自己の権力確立・伸展のために、モンゴル内の既存の秩序では最有力ではない者を取って取り立てたことを明らかにし、かかる巧みな変化がホンタイジ期のモンゴル統治の本質だったと結論付けた。

午後最初の、田広林「遼代内陸欧亚草原東西文化互動的考古学観察」は、遼墓で発見された壁画や金銀製品等に基づき、遼代の東西間交流を検討。まず、契丹式髻髪の特徴

を提示し、髻髪が古代エジプトに由来し、それが古代の地中海一帯に広く流行したと指摘。そして、漢魏時代に髻髪が中国北方に伝わり、その東方への伝播においてソグド人が重要な役割を果たしたと論じた。また、このような東方への文化の伝播が、金属葬具や雞冠壺・瓔珞からも跡付けられることができるとした。

続いて、李玉君「金朝「郎君」称呼考証」は、金朝で用いられた「郎君」の語が指し示す範囲を検討。まず、中国史上での「郎君」の用例やその意味を確認した。続いて、先行研究では、『三朝北盟会編』の影響から、金朝における「郎君」が宗室のみを指すと考えられたことを指摘。そのうえで、金朝における実際の使用例を再検討し、「郎君」が非宗室中の貴族に対しても用いられていたことを明示。さらに、「郎君」が尚書省や親王府において護衛や紙筆の管理を委ねられた官員をも指すことを明らかにした。

夕食後、杉山清彦「二〇一三年一〇月コーカサス（グルジア・アルメニア）調査報告」は、平成二四〜二六年度科研費「ユーラシア諸帝国における君主と軍事集団の展開―境界を越える「武人」とその紐帯」（研究代表者：清水和裕）にて実施した、グルジア・アルメニア調査について写真を交えて紹介。まず、時代・地域・宗教の枠にとらわれず、王権を支える軍事集団に着目して、君主と武人、武人

同士の関係のあり方を検討するという、同科研の趣旨を説明。続いて、調査にて撮影した写真から、現地の地理や地域的特徴を示すとともに、文書館にて発見した諸言語史料（満文・アルメニア文・アラビア文）の一部を紹介。さらに、今後の研究の展望について解説した。

三日目（一九日）も、計五本の報告。午前最初の村上智見「モンゴル国の突厥墳墓出土織物から見た七世紀の国際交流」は、モンゴル国の突厥墳墓出土織物から当時の国際交流を分析。まず、研究対象のオラーン・ヘレム墓とザーマル乙突墓の概要を確認。続いて、両墳墓の出土織物に関する科学調査の結果を提示。そこで、オラーン・ヘレム墓の出土織物には、中国製、西方製、さらにその両方の特徴を備えたものが確認できるとした。そして、これらが当時のモンゴル高原における盛んな東西交流を裏付けるものであるとし、絹織物の調査によってシルクロード交流の実態解明に資するという研究の展望を示した。

続いて、池田修太郎「清朝の打箭爐支配成立過程について」は、康熙三十八年に東チベットの打箭爐で土司がチベットの官に殺害された事件の再検討を通じ、清朝の打箭爐支配成立過程を論じた。まず、清朝支配以前の打箭爐は、ダライラマ政権が主導権を握り、チベットの支配下にあったと指摘。そして、チベット官の行動は、ダライラマ政

権の権力基盤強化を目的としたものであり、官が四川巡撫于養志との関係を持みに行動を起こしたとした。そのうえで、清朝の打箭爐制圧が、打箭爐周辺勢力の再編をもたらし、「草原の道」を経由する四川―ラサルトを開拓する契機となったとまとめた。

午後最初の報告、中井勇人「一五世紀前半における建州ジュシエンの対朝鮮関係―李滿住による通交統制に着目して」は、明朝中心の安定した国際秩序が移り変わる一四三〇年代の建州ジュシエンと朝鮮との間の通交秩序を検討。従来ジュシエン側の通交統制の視点からの研究が行われていないとし、建州衛と朝鮮王朝の関係を整理した。まず、一四三三年の閔延の役によって建州衛が混乱状態に陥り、多くのジュシエン人が朝鮮へと通交するようになったと指摘。そこで、明の衛所官の印信を持つ建州衛の首長層が、「公幹」の証明のために「文憑」や「文契」を発給するようになったとし、建州衛のジュシエン首長層にとって、通交統制が自身の権力確保と衛所の秩序維持に必要であったと結論付けた。

続いて、磯部淳史「清朝皇帝との関係よりみた三藩王家の動向―尚之信とその兄弟を中心に」は、三藩王家の内、尚之信とその兄弟を中心として清朝皇帝との関係を検討。まず、従来の研究を整理し、尚之信と尚之孝の対立の背景

や、三藩の乱後における清朝の尚氏への対応が課題として残されていると指摘。続いて、尚之信と尚之孝の経歴を示し、両者の対立の背景には尚之孝の経歴が影響していたと推論。加えて、三藩との婚姻等に対する清朝側の対応の差を明らかにし、それが三藩と清朝との関係の「近さ」に由来するものとまとめた。また、平南藩解体後に尚之隆が内大臣・領侍衛内大臣へと昇進したことを指摘し、それを、「藩屏」から清朝皇帝の側近へと推移した事例として提示した。

夕食後、最後の報告、松田孝一「モンゴル調査（一九九四～二〇一四年）の点描」は、一九九四年から二〇〇年に及ぶ、日本とモンゴルによる合同ピチエース（碑文）調査の全体像と、これまでの調査結果の一部を紹介するスライド報告。まず、ピチエース調査開始の経緯と調査の意義を説明。続いて、調査を通じて発見した遺蹟や碑文・墨書等の一部について、発見に至った経緯や、碑文の拓本採取の作業等を含めて写真を交えて紹介した。そして、チンギス・カン勃興期のカラキタイのモンゴル高原への影響力など、本調査を通じて得られた知見と、今後の調査・研究の展望について解説した。

最終日（二〇日）は、朝食後に解散となった。
今年の野尻湖クルルタイは、参加者・報告者の数が例年

に比べて少なかったものの、各報告について参加者同士でじっくりと議論することができたように感じた。各報告は、研究対象の地域・時代ともに多彩で、野尻湖クルルタイらしいバラエティに富んだプログラムであった。また、昨年に引き続き、記念撮影の場が設けられるなど、参加者間の活発な交流が行われた。なお、今回は北陸新幹線延伸の影響で、一部で会場へのアクセス方法に変更があったが、事務局から詳細な案内があった。

今回で五二回を数える野尻湖クルルタイは、幅広い世代・分野の研究者が、直接、時間をかけて意見交換し、問題意識を共有できる貴重な場である。研究の細分化が進む中で、今後、研究交流の場としてよりいっそう発展していくことを願ってやまない。

なお、来年の野尻湖クルルタイは、例年通り、七月一日（金）～七月十八日（月）の三泊四日の日程で、同じく藤屋旅館にて開催される予定である。

（筑波大学非常勤講師）